

小学生向けの手話学習

Sign language learning for elementary school students

沼倉 美羽

指導教員 李盛姫

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 ビジュアルコミュニケーション研究室

キーワード：手話学習、小学生、書き込み式ドリル、ICT教材

1. 研究背景

昨今、日本では新型コロナウイルス感染症の流行の影響によって新しい生活様式が提唱され、日常的にマスクを着用することが常識・マナーとなった。その中で、私の祖父母にある悩みが生まれた。祖父母は両者とも聴覚障害を持っており、補聴器をつけても音が聞こえない。そのため、マスクを着用した状態でのコミュニケーションにストレスを感じているという。

多くの場合、聴覚障害者は身の回りの人との自然な会話を楽しむときに、口話と手話を組み合わせて用いる。しかし、現在はマスクによって顔が半分以上隠れてしまい、口元の確認ができない。また、身近な人以外の健常者に手話はほぼ通じないのが現状である。

厚生労働省の「平成18年身体障害児・者実態調査結果」によると、日本の聴覚障害者の人数は約276,000人とされている。これは日本人口の約0.22%人にあたる。聴覚障害者が健常者とのコミュニケーションが取れない問題は以前からずっと存在しており、新しい生活様式のもとで影響が顕著になった。祖父母のような、障害を抱えている方々と健常者の間のコミュニケーションが円滑な共生社会を作るための手助けをすることに研究意義があると私は考える。

2. 研究目的

この問題を解決するためには、聴覚障害者や手

話に対する健常者の理解度を上げ、健常者にとつても手話が身近なものに感じられる社会にしていく必要があると考える。

本研究の目的は、健常者が手話に興味を持つための機会を増加させ、手話学習へのハードルを下げることである。

3. 調査内容

健常者が手話に触れる機会にはどのようなものがあるのか現状を調べた。健常者が手話に触れる機会は、書籍、手話ニュースなどのテレビ番組、会見の中継などで時折目にする手話通訳士の通訳、市町村などの団体が主催している手話教室、歌の振り付けなど、意外と多くある。このような多くの機会は、能動的な受け手に対しては効果がある。一方で、手話に興味がない人にも手話に触れてもらい、興味を惹くきっかけとなりうるものもあつた。それは、小学校の総合的な学習の時間や道徳の授業の一環として行われている手話体験学習である。このような、受動的姿勢な不特定多数の受け手に対しても働きかけることができる授業や講習会のようなカタチが本研究の提案に適していると考える。また、持続可能な社会の実現へと繋いでいく提案になるように、子供たちを対象とすることは理にかなっていると考えられる。

4. インタビュー調査

小学校で行われる手話体験学習の内容を掘り下

げて調査を行った。区の手話サークルに所属しており、地域の小学校などで何度も特別講師として聴覚障害者への理解を深めるための授業を行っている祖母に話を聞き、参考にしているパンフレットや実際に授業で使用している資料を見せてもらった（図1）。

祖母によると、小学校で行っている特別授業は基本単発で、継続して行うことはほぼないという。また、統一された授業の段取りはなく、講師仲間の友人たちは各自で授業内容を独自に考えて行っているのだそうだ。祖母の授業は、聴覚障害者の生活でどのようなことが不便に感じるかなどを考えさせるクイズと簡単な指文字・手話講座という構成になっている。



図1 祖母が授業で使用している資料の一部

5. 分析・考察

祖母へのインタビュー調査やその時に見せてもらった資料の内容から、以下のような2つの問題が浮き彫りになった。手話とは言語であるはずなのに、英語や国語のような統一された指導要領やそれを助けるツールが確立されていないこと、単発のイベントのような授業であることがほとんどで深く掘り下げるられないこと、この2点である。この問題点を補い授業の内容をより充実させることで、手話や聴覚障害者に関する知識の定着に繋がり、本研究の目的である「健常者が手話に興味を持つための機会を増加させ、手話学習へのハードルを下げること」にも繋がると考察する。

6. 提案内容

以上の調査・分析の結果から判明した問題点を

解決すべく、私は小学生向けの手話学習ツール、及び学習内容の提案をする。手話学習ツールについては書き込み式ドリル、掛図（黒板に張り出す大きめのパネルのような資料のこと）、ICT教材の3つを、それぞれ制作する。学習内容はシラバスにまとめる。

書き込み式ドリルには、手話は言語の一つであることを感覚で理解してもらうねらいがある。本研究では筆者が小学校時代に使用していたワークブックや現在書店で販売している小学生向けの英語のドリルを参考にデザインを提案する（図2）。

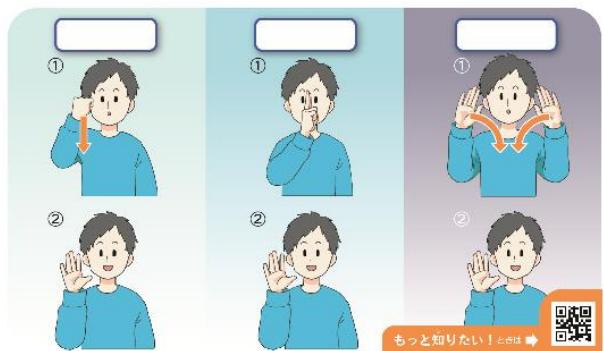


図2 書き込み式ドリルのイラスト案

7. 今後の展開

手話学習ツールの一部である掛図とICT教材のデザインにも着手し、最終的には実際に数回分の授業ができるように内容を詰めていく。シラバスについては小学校の言語系の授業や総合的な学習時間の指導要領を参考にブラッシュアップしていく。

参考文献

- [1] 厚生労働省「平成18年身体障害児・者実態調査結果」
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/d1/01_0001.pdf (2021年10月18日閲覧)
- [2] 一般財団法人全日本ろうあ連盟『新たっちゃんと学ぼう』(2016年11月15日発行)
- [3] 神奈川県福祉子どもみらい局福祉部地域福祉課『手話を学んでみよう！～拡げよう豊かなコミュニケーションを～』発行年度記載なし